「やせうま」伝説の背景を想う

小野　三郎

挟間町古野地区に、いつの頃からか語り伝えられてきた「やせうま」伝説がある。

「やせうま」発祥の地由来　　挟間町誌より

お盆時に小麦粉を捏ねて団子状にし引き伸ばしそれを茹で上げ砂糖と黄粉をまぶして食べている「やせうま」は大分名物として広く知られている。

この「やせうま」は古野が発祥の地と言い伝えられている。

「その昔京都の御所（天皇のいるところ）にいた藤原鶴清麿という若君が乳母である大原八瀬とこの地（古野下原）に隠遁して来た。八瀬は非常に信仰心が篤く若君の無事な成長を祈るためこの妙蓮寺の地蔵菩薩にお参りに来た。

八瀬と連だって来る若君はおなかがすくと八瀬に「やせ　うま、やせ　うまくれ」と催促しそのたびに小麦粉を捏ねて黄粉をまぶしたものをおやつとして作って与えた。

それがいつのまにか「やせうま」になった。

これがことの起こりである。

この地ではお盆の二十三日になるとここ妙蓮寺で催される御施餓鬼会でお茶菓子として必ず作って食べられており今では習慣化され広く行き渡り特に夏の風物として欠かせない食べ物となっている。

一．生き続けている伝説

伝説は伝説としてそっとしておくがよいとの思いがある。他方、何百年のながい間伝えられてきた伝説の不思議さを知りたい思いもある。そこで、昔の人々の暮らしや願いと伝説との関りを調べてみようと思った。

二．古野（明治以前は黒野村）地区のくらし

伝説の生まれた古野地区は由布川台地にあり、昔から水不足の地である。古野地区の小字は町内他地区に比べ小字の規模が小さく、その数は多い。地勢上、狭い耕地があちこちに点在していたのであろう。この台地には石器時代や縄文晩期の遺跡があり、弥生時代の遺物が多数発見されている。医大バイパス道路工事の際、製塩土器が発見された。当時既に古野台地に集落があり比較的多くの人々が住んでいたらしい。

江戸時代の石高　　（挟間町誌）

	正保郷帳4年（1647）					元禄14年（1701）				天保5年（1834）			
	田	畑	畑割会	計	備考	増	増／正保	計	備考	増	増／正保	計	備考
黒野村	48	70	60％	118		28	24％	146	新13	30	21％	176	
古原村	15	14	48％	29		4	14％	33		9	27％	42	
三船村	129	77	37％	207		12	6％	219		25	11％	244	

領主・幕府は十七世紀から全国的に新田開発を奨励した。石盛りを参考にして黒野の正保郷帳の耕地面積を試算すると田が約五町歩、畑が約九町歩と推測される。正保四年から約五十年の間に収量は二十四％増えている。増収の半分は新田である。増収分の十三石に相当する面積は一町歩強である。井路のない時代に畑を田にするのでも大変である。人力で約一町歩強の開発は大事業である。苦労して収量を増やしても重い年貢が課せられた。

万治元年（1658）の年貢負担　（挟間町誌）

	高	年貢	内大豆	割合	銀(匁)
黒野村	133.3	61.3	36.5	0.46	19.1
古原村	30.9	13.3	7.7	0.42	6.2
三船村	212.6	100.4	36.1	0.47	18.81

※石盛　上市村　承応3年　（1654）

上田	中田	下田	下下田
1.3	1.1	0.9	0.7
上畑	中畑	下畑	屋敷
1.1	0.9	0.7	1.0

※黒野村と古原村は明治4年に合併、古野となる。
※石盛；1反当りの課税評価額。条件によって異なる。

年貢の納入は村請（むらうけ）制がとられ村全体で完納する責任を持たされていた。当時の税には米・大豆の現物納、銀銭納、労働力提供の三種類があった。他に村や組の運営費も納めなければならなかった。

四十五％の年貢は重税である。その上さらに銀銭納が課せられている。万治元年、黒野村では茶、柿、綿等の商品作物が栽培されているが、銀銭納の金額には到底及ばなかったであろう。

光林寺（赤野村・臼杵領）の過去帳によると享保十七年のウンカによる大凶作の翌享保一八年の死亡者数が異常に多い。享保一八年前後数年間の死亡者数は六人から八人であるが、享保十八年は十六人死亡している。その内、一月から五月の麦の端境期の間に十一人死亡している。多少貧富の差はあったであろうが多くの農民の厳しい生活が推察される。（挟間町誌）

元禄六年（一六九三）から安政三年（一八五〇）の約一五〇年間に農民の命である田の質入れ・売り渡しの証文が四十四通ある。生活に行き詰った農民の多かったことがわかる。安政二年（一八五五）の年貢は七十％になっており、納入の内訳に種籾の利息、種大豆の利息を納めた記録が残されている。（後藤家文書）年貢を出すために植えなければならない種籾や種大豆まで食べつくし、種子を村内で融通し合うゆとりがなく藩から借りるほど村内は貧しかったのである。

東行村（臼杵藩）は天明四年（一七八一）から天明八年の四年間に村単位で藩から三十石を借り、返済は半分免除で、十五石を七年据え置き十五年年賦で返済の記録があるが、おそらく返済はできな

かったと思われる。

東行村　首藤家（小庄屋）の農業経営（文化６年（1809）～文化９年）　（挟間町誌）

	大麦(石)	裸麦	小麦	粟	籾	蕎麦	黒大豆	大豆	青大豆	小豆	いちび(貫)	木綿(束)	七嶋(枚)
6年	4	3	3.5	8.4	52.5								
7年	3.6	2.5	8.2	6.9	39.4	0.6	0.1	1.8			11.5		30
8年	3	3	8.1	6.6	52.6			2.3			10.5		45
9年	4.1	3.5	12.7	6.1	53.9		0.1	1.6	0.07	0.4	8.3	10.4	6

（挟間町誌）

生産している作物の種類の多いのはなぜだろうか。単一作物栽培の短所―遊休地が生ずる、不作の場合のリスクが大きい、連作障害の発生等―を回避し収量の確実性と多収穫を願って、あえて栽培技術を要し、手間と労力を費やして多くの種類の作物を生産したと思われる。

麦・裸麦は米を補う食糧であり、また調味料等にも利用していたと思われる。小麦・粟の生産量が麦・裸麦より多いのは調理や食べ方の工夫が麦・裸麦より容易なため、自家用の米を控えるのに重要な食糧であったと思われる。

三．施餓鬼と盂蘭盆

施餓鬼は盂蘭盆経の七月十五日に「飯と五つの果物」を供えて供養すれば業苦から救われると言う故事に基づいている。盂蘭盆はこの施餓鬼を中心として始まった祖霊を祭る行事である。

平安時代、盂蘭盆には米の他に小麦、熟瓜、青瓜、ナスヒ，根イモ、枝大豆などいろいろな夏作物を供えていた。この御供えには夏作物の収穫をよろこぶとともに感謝の意味合いがあったと思われる。麦の収穫と田植えのきびしい農作業が一段落したときに祖霊と自然に感謝する安らぎのひと時が盂蘭盆であった。（ハタケと日本人）

四．妙蓮寺の施餓鬼と「やせうま」

黒野村の田畑の面積や人口の変遷は不明であるが地勢や水不足からいつの時代も米は不足していたと思われる。一六五〇年代、黒野地区に田が約五町歩、畑が約九町歩あったと推測される。二毛作をしていても厳しい年貢の取り立てのもとでは農民の命をつなぐのは、いろいろな穀物であった。黒野に住む人々は少ない米を補うため穀物を食べて暮らしていたと思われる。穀物のなかでは小麦粉は食べ方の工夫をしやすい材料である。七夕に麦縄（むぎなわ）※を食べる習慣があれば小麦粉の加工技術はすすんでいたであろう。また、穀物を食べる暮らしを長く続けるなかで食べ方の工夫がすすみ、「やせうま」か、或いはそれに近いものを食べるようになっていたとしても不思議ではない。

※麦縄（むぎなわ）＝索餅（さくべい）　小麦粉、米粉、塩を水で練り細長く加工し乾燥させたもの＝今の素麺

平安時代から七夕に麦縄を食べる習慣があった。　（ハタケと日本人）

妙蓮寺の施餓鬼は昭和の初めまで盛大に行われていた。北は杵築、東は大在・坂市方面から信仰の篤い人々が参詣し夜を徹していた。江戸期の妙蓮寺の施餓鬼は昭和初期以上に盛会であったと想像される。この時、本来なら「米飯」をお供えしてそれをみんなで共食(直会)するところである。しかし、施餓鬼会の時期は稲の収穫前で米は乏しい。六月に穫り入れた麦・小麦はある。そこで、村人が「米飯」の代わりに大切に食べている「食べ物」＝「麦・小麦食」をお供えするようになったと思われる。

「お供え」は、それを下げてみんなで共食(直会)する。そのためには人数に応じた相当な量が必要であり、また分け易く、食べ易い方がよい。「やせうま」はこれらの条件にかなっており作り方も比較的簡単なため、その継承も容易である。このようなことから「米飯」をお供えする代わりに「小麦粉で作ったもの」＝「やせうま」をお供えするようになったと思われる。

当初は「小麦食」を供えることに多少のためらいがあったかも知れないが「いのち」をつなぐ「食べもの」だから「米」と同じと言う心情になり、「お供え」として伝統化したと思われる。

五. 伝説の創出

「やせ」の名で想起されるのは京都の北にある八瀬の地である。この地は後醍醐※天皇が比叡山に潜幸の折お供をした八瀬童子の地である。八瀬童子は特権を得て大いに勢力をふるった。

「やせうま」伝説は下記のように、この天皇潜幸の話と共通点が多いのは偶然の一致だろうか。天皇潜幸の史実を参考にしたのであれば、誰知らず長い年月の間に完成した話ではなく、後世の人の創作と思われる。

天　皇　比叡山　延暦寺(天台宗)　潜幸　お供　八瀬童子
御所の若君　御所の杜　妙蓮寺(天台宗)　隠遁　お供　八瀬
(黒野下原)

妙蓮寺は十七世紀はじめに再興※され、その後ほぼ百年の間に地蔵※堂の造り替え、厨子※の新造、寺領の増加※等着実に寺院の力が増している。

大胆な想像をすれば妙蓮寺は寺の再興に合わせて寺勢拡大の諸施策を行なった。この施策に携わった人の中に天皇潜幸の話を識る人物(延暦寺の僧?)がいて、その人物が施策の一つとして、高貴な人物が登場する話を創って妙蓮寺のイメージアップを図ったのではあるまいか。また、若君が「やせうま」を度々ねだり食べる話は、米が乏しい故に米やその製品が八瀬の手に入らず小麦粉は得られたと考えられる。また、村人が日常食べている小麦食を高貴な若君が食べることで麦食は米に劣らず価値ある食べ物であることを村人に見直させ、麦食は立派な食べ物であることを認識させるはたらきがあったと思われる。

※ 後醍醐天皇(一三一八～一三三九)、妙蓮寺の再興(寛永一六二四～一六四三)、地蔵堂造営(延宝一六七三～一六八〇)
厨子の新造(元禄一六八八～一七〇三)、寺領増加(宝永一七〇四

～一七一〇）

※　戸次方面では「鮑腸汁（ほうちようじる）」を殿様に献じた。（三浦梅園「豊後跡考」）また、三重町方面では芋餡をまぶした「やせうま？」を岡城の殿様に献上した話がある。

参考図書

挟間町誌（昭和五十九年発行）
イモと日本人　坪井洋文　未来社
ハタケと日本人　木村茂光　中公新書
日本中世の民衆像　網野善彦　岩波新書